

この旅行記は、ワングルのOB会報用に手がけましたものの、あまりに長くなりすぎました。そこで「限定版」として20部をカラーコピー付きで制作。気にかけていただきました方々に、先に帰国報告で送らせていただきました。

それが「少なからぬ」反響を頂き、また私自身、ガイド本には書いてない事をお伝えしたい願望も根強くありました。そのうえに、この頃は老人力も強まりまして、「ガマン、ヒカエメ」を美德と思わず、「ワガママ」こそやっておくべきの信条に至っております。（「昔からワガママ」の声も……。こうやって、老人は頑迷になる……）

よって全編大公開。編集長の独断と偏見を究める事にしました。「限定版」に胸キュンをされた方・・・オンナゴコロとはその程度のものです。

<はじめに>

ネパールはインドの北、緯度では奄美大島と同じくらい。北海道の2倍の面積をもつ国です。エヴェレスト登山で知られる国ですが、入山隊数は制限されており、今は、トレッキングが目的の外国人旅行者が急増しています。「厳冬期ヒマラヤ!」と吃驚されましたが、10月から3月が乾期でトレッキングシーズン。また、高山病さえ克服できれば、5545mのカラパタールもトレッキングの延長のままだに踏む事ができます。

今回の私の旅をKUWV・OBの皆様に分かりやすく例えれば、芝原から、中河内、下小屋を経て、赤摩木古・大門へ・・・が似たイメージになります。それらを2000m程高くし、まわりに6000m級の山を配置すれば、あたらずといえども遠からず。高山病の予防上「ゆっくり」の人のほうが賢いとされ、それもOBにはお薦めです。

まず深井君から、カタログを取り寄せて下さい。すると、チャンスはなぜか転がってくるものです。「I wish」が全ての夢の始まりです。

1949 ネパール開国

1951 クンブに最初の登山隊入域

1953 チョモランマ（エヴェレスト）初登頂

エドモンド・ヒラリー、テンジン・ノ

ルゲイ初登頂者となる

1964 ルクラに滑走路完成

1975 サガルマータ（エヴェレストのネパ

ル名）国立公園設立

登山・トレッキング

登山隊 クンブへの

外国人入国数 目的旅行者数 登山隊数 隊員数 入域者数

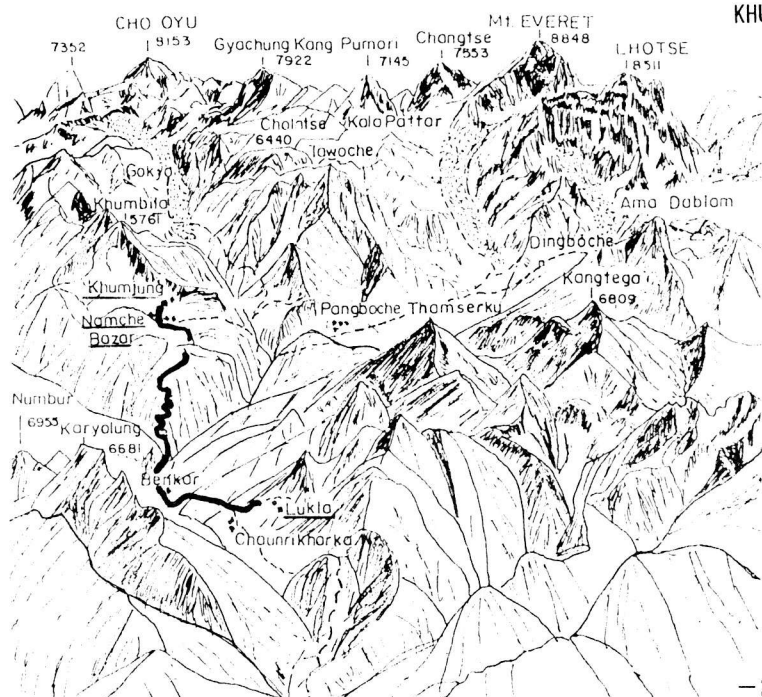
1962 6,179

1975 92,400 12,587 4,254

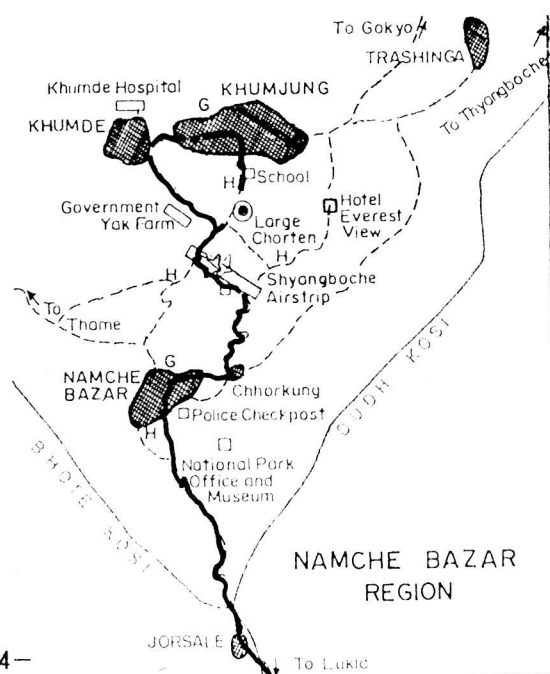
1985 180,989 28,707 91 824 6,906

1990 254,885 39,999 8,290

1995 363,395 84,524 91 624



KHUMBU Mount Everest Trekking Mapより



舞台

「ナマスデ」と声を掛けると、日本人と目ざとく識別した子供たちからは、「こんにちわ」のあいさつが返ってくる。ここはネパール、クンプ地方のクンデ・クムジ・ユン村。

黒板と長椅子だけの空
間へ、家での
昼食を終
えた子供た
ちが戻って
くる。

くる。

シェルパ語に文字はない。子供たちは学校で、ネパール語の読み書きを習い、算数、歴史、英語へと領域を広げていく。

女は家、ロジ、ジャガイモ畑

を守り、男

は出稼ぎと

ガイド・ポ

ーターで現

金収入を得

る。そんな暮らしに見合った実学を

学ぶ。



舟田節子
(金大ワンゲルOB会
事務局長)

シェルパのふるさと

ちなみに私たちの青年ガイドの三人は日本語もペラペラである。聞けば、富山県の芦峰寺の建設会社と技術交流の枠があり、七年前から毎年八人が一年間の研修に来ているという。そんな語学力、気配り、ロジの厨房での料理の腕、買い物での商品知識など、彼らは第一級の「生きる力」の持ち主である。

にもかかわらず、七割が失業し、カーストの残る国では、ガイド・ポーターの口を待っているしかない。故郷の村には、祭の当番、三度の結婚セレモニーなど、貯えを放出させる因習がある。

一方、国は自国民の出国や外資持ち込みに厳しい制限を設けている。日本での思い出に彼らの目が輝く時、私たちの胸は限りなく痛んだ。彼らの事情を変える力はない。

しかし日本の子供たちには、今の日本に生きる幸せと、生き方をじっくり考えてほしい。
(金沢市)

*ヒマラヤ！

Y2Kがさらに騒がしくなってきた頃、丁度西暦2000年は銀婚式の年にもあたる事を私はこじつけだしていた。いかにフランチャイズの自営塾とはいえ、「休まない」は信用の第一歩。この18年、振替日なしの休室は、三男坊の出産の一日のみだ。

その信条が大揺れしたのが昨年。実家の兄嫁が2年3ヶ月の闘病の末、50才で亡くなった。悠悠自適のはずだった実家の母が、闘病中から主婦に返り咲く事になった。

これまでも、私は少なからぬ悲報に接し涙してきたが、やはりそれは葬儀のその場や、思い出す時だけの悲嘆だった。周囲の日常の歯車がどう狂うものなのかは、初めての身につまされる直視といえた。

「必要な人」に戻った母はそれなりに生き甲斐を得ていようだ。が、その娘は、わが子を育てあげて責任を果たした後に、必ずしも思いのままになる第二の人生が待っている訳ではない事を思い知った。「親の責任」・・・リストラの時代に、それだけはと耐えている人は多かるう。それを果たせなかった兄嫁は無念だったろうし、それを分かち合う伴侶を失った兄も哀れだ。

ところが、そんな身近な悲劇が、心して「親の責任」を全うしなければ、「より無難に、より手堅く」の教訓へと私の場合は結びつかなかった。いつどんなご縁で歯車が狂うかしかない。「周りの状況が全て整ってから」まで、待つてはいられないし、そもそもそんな事などありえないのだ。チャンスは自分が作らなければ、とびつかなければ・・・。

そんなあたりが、「生き方」の別れ目になっていくのだろう。山溪の海外ツアーのページに目のとまる自分がいた。2000年だもの、銀婚式だもの・・・「親の責任」「仕事の責任」を、そうこじつけて外そうとしている自分がいた。29期深井君からのツアーカタログも、ようやく本気で目を通してみた。値段、日数、いつ頃？その頃にはヒマラヤに傾きつつあった。思い切ってなら、不便そうな所が先だ。へえ、秋がベストなんだ。そういえば上馬夫妻も秋だった。

そんな「夢」に色をつけただしていた頃に、思いがけず、高校同窓のM氏(北大山スキー部OB・設計士)から、クンプ協会の公開セミナーへのお誘いが来た。一度も同級になったことのない彼とは、同窓会で顔を合わせるようになってから同じ系統のサークルであった事がわかり、近年情報交換を始めている。「ヒマラヤの人

・自然・文化」のテーマが個人的にもタイムリーで、三男坊も連れて参加する事にした。

10月23日、国際交流センター。「カンチェン・ジュンガ縦走」の記録映画に続き、「ヒマラヤの民・シェルパ族」の講師は、当時（1984）の登山隊隊長・鹿野勝彦氏。金大文学部文化人類学教授で、たった二人が部員の山岳部の顧問でもある。金沢の山岳界はもったいない事をしているが、私も、その日まで、ああ例の田村さんと親交のあった、環境問題に首つっこんでいるあの鹿野さんの旦那さん・・・とまでしか知らなかった。

意外な経歴にびっくりの講演の後、「シェルパのふるさとに博物館を建てよう」が趣旨のクンプ協会の説明があり、春には、現地紹介を意図した交流ツアーを出すという。

エーッ！色をつけても、「まあ夢だよ」の筈だった。その夢がコロと前に転がり出てきたのだ。しかも「博物館を建てよう」や「シェルパとの交流」なら、生徒や親への「言い訳」もできるではないか！そうだよ、これがチャンスってやつさ！

日も決まっていなのに「行く！」と即答した。「決断が速い」と、M氏に感心された。というか、呆れられたが・・・こうして、ヒマラヤへの旅が実現する事になったのだ。

* 2月23日（水）

ロイヤルネパールは陸路を飛ぶ。上海の水郷地帯を抜けてからは、鰯の背を並べたような雲がひたすら続く。その上にいるのが今も夢みたいだ。

「ヒマラヤを見てこようよ」旦那の方は「そんな不潔な所！」と、案の定のパスとなる。最後まで「親の責任」がひっかかった私には、願ってもない展開になった。「銀婚式」の言い訳なんかは、とっくにふっとんでいる。言い訳なんかどうでもいいのだ。この際、「ワガママ」に撒しよう。

「行く準備」より「留守にする準備」に追われた4ヶ月。広げたては途方に暮れた48年分の身辺整理は、財務・税務以外は、こだわりの次元の事と、吹っ切れてからはかどるようになる。妻・母・嫁・塾長・地域住人・OB会事務局長他の役割の手配にもへとへとになる。が、この煩わしさこそが48年生きてきた証でもあった。手配の一段落がついた時には、それらが待っていてくれるのは有り難い事と思えるようになった。ただ、ごまかしのきく妻・母他に比べ

、競争のただ中の塾業の方は、やはりきついのがあった。それは改めて「なぜ働くのか」の問いと答えも与えた。「行く！」と決めただけで生じてくる諸々、発想の転換が、新鮮でもあった。

おたおた忙しがっているうちに、ミレニアムの年を迎えた。年度末も重なり、束の退会届を手にしながらも、私は「自分の為だけに時間を使う贅沢さ」に酔った。そして、とうとう機上の人になったのだ。

「あれがエヴェレストですよ」

前席のNGOのおじさんが教えてくれる。名残の夕映えに浮かぶ紺色の三角形。見たよー！もっと近くで見るんだよ！高度が下がる。まばらに電灯のともる街が流れていく。

カトマンズに降り立つ。薄暗い空港だ。荷物に飛び付いてくる子供達。迎えのエージェントの実子かと思ったら、赤の他人で、お金をせびられたのには参った。歓迎のカタ（シルクの薄布）をかけてもらう。子供達は車の窓まで開けて「ヒャクエン、ヒャクエン」と手を伸ばす。25年前の新婚旅行でのバンコックの子供達を思い出す。子供相手の仕事をしていながら、こんな子供達がいる事をすっかり忘れていた。

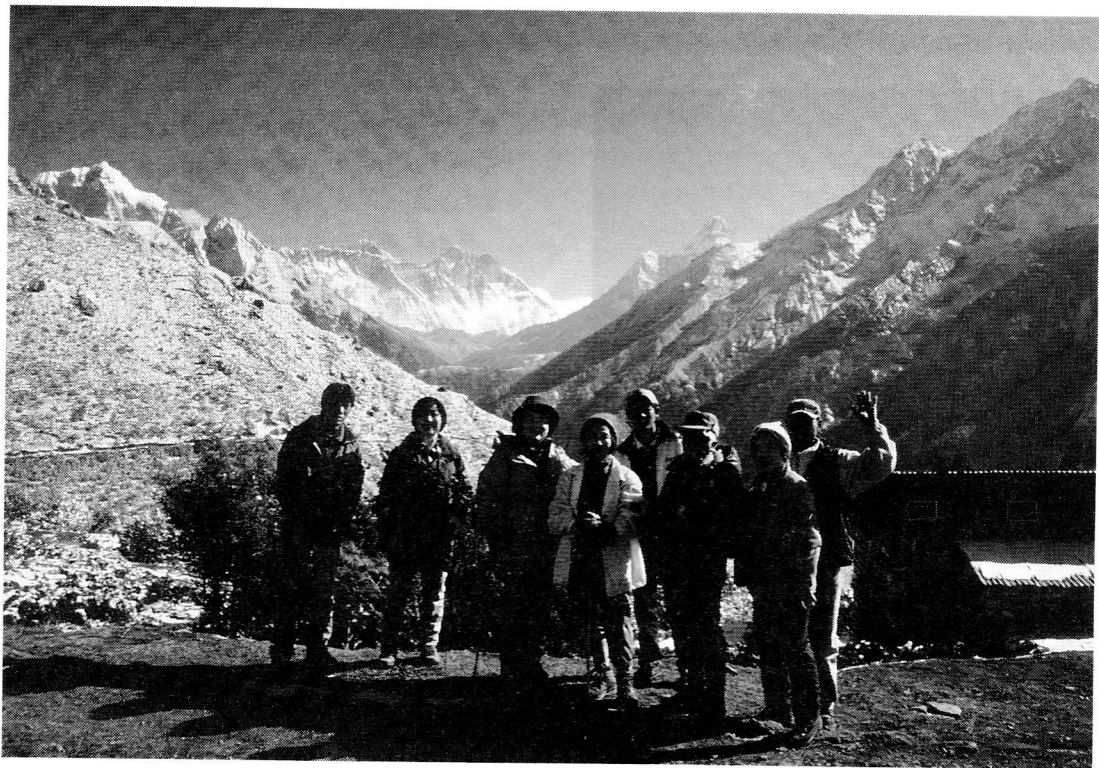
諦めた子供達が他の車に群がっていく。エヴェレスト！の興奮がドーンと落ちた。さっきまで感じていた幸せな贅沢にも、ビリビリとひびが入った。

市街と思えぬくらい車は揺れて、ホテルに到着。郵便事情がとにかく悪いと聞いていたので、行きもしないうちから、少しでも早く確実に着くようにとポストカードをしたためる。ともかく教室の子供達へのサービスに送らなければ・・・何の事はない、ネパールの初夜も、学研漬けで暮れた。

ここで、今回のメンバーを紹介しよう。金沢勢が6名。東京から1名。合流のH君はG氏の甥で、卒業旅行。6名の方は、クンプ協会代表のG氏、市役所を退職して数年のK氏、学研仲間のYさん、Uさん、Yさんの友人のOさん、私の、男2、女4。女同志は山仲間でもある。

Yさんはツアーの話がもちあがった3ヶ月前に、Uさんはそのさらに1年前に検査入院からの急死でご主人を亡くしていた。仕事をやってきた強み、成人した子供達の存在で、共に立ち直りは早かったが、立ち直れない部分も当然あった。

「別の道を行けば、別の風が吹いているし、別の花も咲いているよ。行ってみよう。」いろんな人種が、宗教が、共存して穏やかに暮している国。神々の山の麓で、貧しくても感謝のう



【ナムチェ東の展望台にて 中央左奥にのぞくエヴェレストと前衛の峰々

左よりTAWACHE・6501 EVEREST・8848 NUPITSE・7855(背後にLHOTSE・8516) AMA DABLAM・6812

タウチ

ヌピセ

ロツェ

アマ・ダブラム

アンヌル Yさん 筆者 Oさん ハクバ K氏 Uさん アンツェリン】

ちに暮らしている人達。癒しがあるような気がした。

まず、説明会に誘った。彼女達の方が海外旅行体験は豊富だが、この異色の旅には心惹かれたようだ。冬が乾期でトレッキングシーズンになる事や、ポーターが荷を運んでくれる事がわかると、これまた「行く！」の即決。またも、M氏を感心させる事になった。彼女達も、身辺整理に、トレーニングにと励んだ。

そしてG氏。彼については、トレッキングを通じてようやくあれこれがわかった。そもそも海を越えて博物館を建てようなんて、話が壮大すぎて、自分の常識中に収まらない。M氏への信用だけで「行く！」と返事をしたものの、その後は彼に、「もしかして宗教団体か？」や「政治的裏があるのか？」や「どこまでマジな話なの？」と問い合わせるはめになった。そして顎髭のG氏が私と同年で、会も同人誌のレベルの規模とつながりである事。ネパールの国であれば、そんな規模の団体であっても、経済格差で建物が建ち、そんなペースでしか進行していない事もわかってきた。

彼は早大卒後、各国へ放浪の旅をしたらしいが、シェルパのふるさとが一番彼のフィーリングに合い、しかも次々と人脈もつながりだしていったらしい。そして競馬新聞の編集という仕事は、丁度シーズンオフがヒマラヤの乾期にあたり、クンプへの、定期・長期訪問が可能である。それらから、彼はクンプとの懸け橋を、宿命のごとく受けとめていっているらしい。「クンプ協会」は、彼の「ピュアな心から生まれた夢」のようだった。「あれだワ、・・・、あれだワ」

の口癖が気にならなくなった頃には、「何が出るかわからないけれど、応援してあげようよ」になったから、やはり彼には、教祖の素質があるようだ。

そんな彼を「かわり者のおじさん」と笑っているH君だって、卒業旅行先に、欧米ではなくヒマラヤを選んだ。「結婚しない変な兄弟ばかり」と嘆く、母親方の親戚の方が彼には性に合うそうだ。能登中島は長じた今も、一人でも訪れる心とむ場所だという。

そして、奥さんに「ヤマンバを襲っても、襲われるな」と意味深に諭されてきたというK氏は（ヤマンバって私達のこと？）、駒草会所属で、お洒落なこだわりのある紳士だった。駒草会とは、金沢でまともに文献を調べての山をやっている人ならわかる、老舗の山の会だ。今では偶数月の飲み会のみが活動とのこと。

ツアー説明の時には多数が来ていたが、結局12日の休みをとれたのは上記のメンバーだった。

* 2月24日（木）

今回、協会はクンデ村にメイルを設置してくる事を目的としていた。よってG氏がプロバイダとの契約他諸々の手続きをカトマンズで行う今日が、私達の市内観光日となる。

カトマンズ盆地のしっとりした朝。向かいの屋上で、朝日に祈る少年の姿が印象的だ。玄関ではキャリアウーマンらしきインド系美人を捕まえ早速記念写真。そしてワゴンに乗り込む。



【スワヤンブナートのストゥーパ】

「わー、牛!」「うわー朝市だよ!」という間もなく、朝の喧騒に巻き込まれる。信号がないどころか、車など意に介さず、往来する人々。「きゃー、どいて」と、思わず足を踏んばっていた面々も、無駄な抵抗を止めてしまう。小型三輪が、満パイの人を乗せ、カラフルなサリー姿が両側を行き交う。果物、生肉、衣類・・・狭い店先に、わずかでも売り物があれば並べてある感じ。貧しく、それでいて不思議なエネルギーが溢れている。

その日は、スワヤンブナート（ラマ教寺院）、国立博物館、ダルバール・スクエア（旧王宮）、ボウダナート（ラマ教寺院）、バシュパティナート（ヒンズー教寺院）を回る。

気後れしてつい財布を開けてしまった物売りを、どうにか振りきれようになり、かえって掛け合いを楽しめるようになった頃には、旅の楽しさが戻ってきた。最初にどっと来た違和感から、少しずつ同じ人間の共通項が見つかりだす。それは「見たい」「知りたい」の食欲さも、困惑の中から蘇らせた。

何より、日本の添乗員みたいな横柄なのにゾロゾロくつつかされて型にはまった見物をするのではなく、好きな所で止まり、言いたい事を言い、触りたい物に触る事ができた。それは、青年ガイド達が、着かず離れずで見守ってくれたお蔭だ。彼らは日本語が「通じる」のレベルどころか、ペラペラだった。物売りには閉

口したもの、このカトマンズには不思議な大らかさがあって、迷子や財布の管理以上の緊張を与えなかった。

汗ばむ陽気の向こうにも、はためくタルタアのかなたにも、白銀の峰々が輝いていた。

* 2月25日（金）

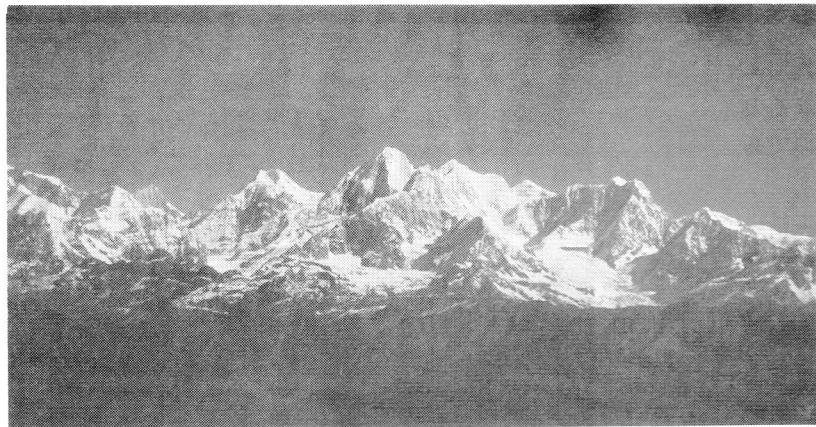
荷物は、ホテルに預けていく分と、ポーターに預ける分と、自前用に分ける。このポーターに担いでもらえるというのが魅力的で、ちらと日本で登れなくなっても、こっちへ来れば可能かも・・・なんて思ったりした。が、そう甘い訳でなく、高度障害が出るので、ポーターに担いでもらえるから、私達でも行けるという事である。

カトマンズの国内便は、さらに貧弱な施設から出る。ここで同行者が増える。きびきび指示を与えているのは、今回のトレッキング会社のアンテンバ社長だが、その父と、彼の義弟にあたるアンナル（私達のガイド28才）の3才になる息子カーディン君。老齢の父はカトマンズへ避寒に来ており、カーディンは脚気の治療に滞在していて、同行してクンデ村へ帰るのだ。奥地のクンプと都会のカトマンズはそんな住み分けもされている。

ちなみに社長は、元教師から建設会社をおこし、トレッキング会社も兼業の、クンデ村の成功者である。その建設会社は、富山県芦峯寺の丸新志鷹の支店であり、彼は技術協力の枠をもらって7年前から、クンプの若者達8名を毎年1年間の研修に送り出している。1年間の間に彼らは、ひらがな、カタカナの読み書きまでできるようになるという。私達の青年ガイドのアンナル、アンツェリンが日本語ペラペラなのはそんなつながりからだった。

お隣富山のあの立山の麓!おばさん達はすっかり嬉しくなり、「どこ行った?」「何がおいしかった?」「いじ悪されたことなかった?」と、たちまち質問責めにする。彼らも打ち解けた顔になって、楽しかった日本での思い出をあれこれと語った。

彼らが手にする研修手当は月に5万円。年に60万円のその額で、帰国すれば家が建つそうだ。だから社長の所へは推薦されたくての「ビール」が絶えないらしい。もちろん彼は国の代表として厳重な人選を行なっている。「クンプのエリート」ともいえる彼らが、どれだけ優秀な人材であるかは、12日間の同行で私達にはよくわかった。にもかかわらず、7割が失業、カー



【カトマンズ空港を飛び立つとまず
眼に入るのがランタン・ジュガール
山群。左奥がシシャバンマ（8013）
中央がドルジェ・ラクパ（6966）
右ヘレンボ・ガン（6979）ブルビ・
チャチュ（6722） 無名峰も多い。】

ストの残る国では、シェルバの彼らは、たまにのガイド役を待つか、出稼ぎかの生き方しかできないのだった。異国の旅人の感傷ぐらいではどうにもならない。

そこらの事情のよくよく分かっているG氏は言った。「こんなふうにはトレッキングに出掛けて来る事。これが結局の所、一番彼らを援助する事になるんですよ」

ともあれ、17人乗りのグルカエアラインは、人機一体の迫力で青空へ浮上した。盆地を抜けると、「耕して天に至る」どおりの段々畑。菜の花も茶畑も……。そして絶句するのみの白銀の峰々。写るものやら分かりもしないシャッターを切る。

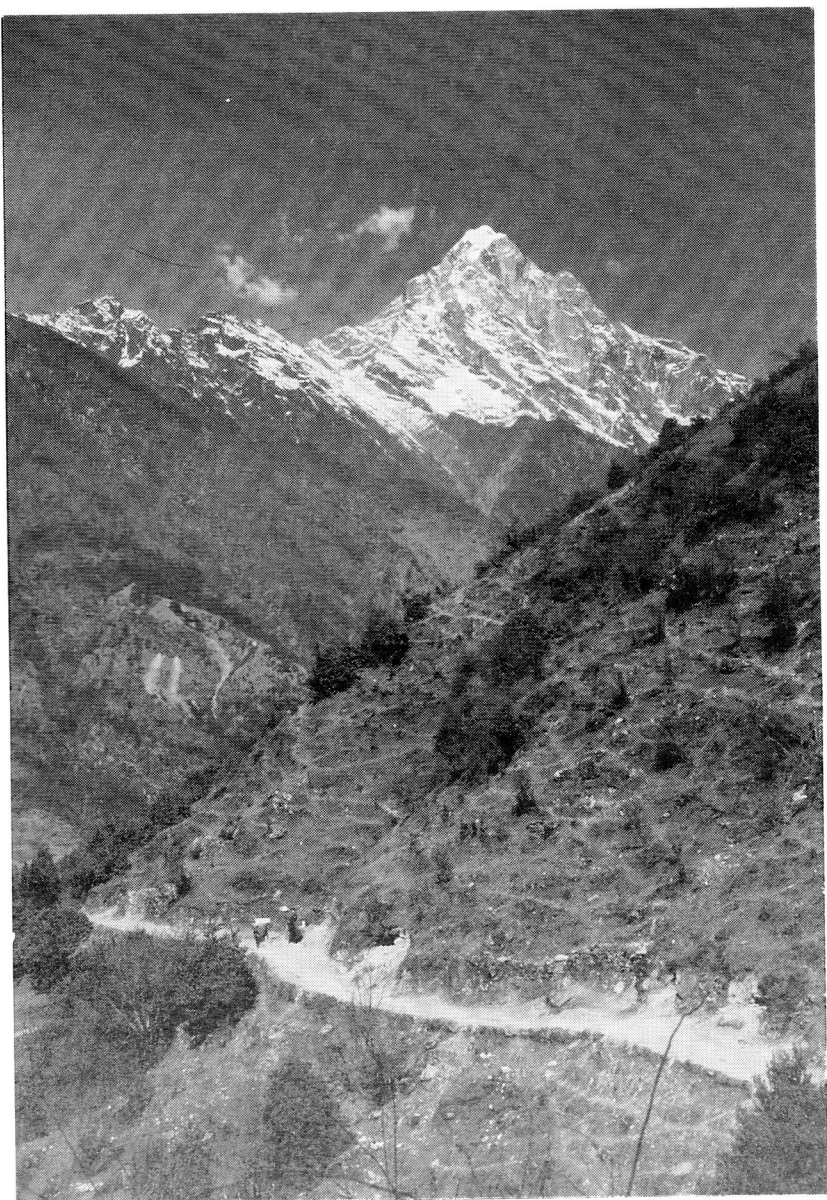
惚れ惚れのうちに、ガガガ・・・と未舗装の滑走路を、登るようにしてルクラへ降り立つ。ガイド本どおりに機体の上にはクワンデ（6187m）が聳える。慌ただしい積み替えの後、今度は駆け下りるが如き助走でグルカは飛び立っていった。それは突然、昔スタンツで見た風呂敷スーパーマンを思い出させた。あの頃から30年。ここにいるのが信じられない。クラッとする程の幸せ……。

ポーターへの荷分けの間、初めてのミルクティーを飲む。早くもワッペン買いを始めるYさを笑いながら、石畳の道、悠然の鶏、額に荷担ぎ紐のポーターも、全てが珍しい。街並を抜けると、チョルテンがあった。再びここへ戻る日まで……「オムマニベメフム」と唱えてマニ車を回す。

最初の1ピッチ分もフィルムがもたなかった。道行くゾッキョ（牛）、はためくタルタア、マニ石、メンダン（マニ石の行列）……珍しいやら嬉しいやら。

最初は下って行くから、クワンデはますます高く前方に聳える。ナムチェは、あの山を右に回り込んだ所。そこからクワンデは台形に見える、今見える三角は、その台形の左端にあたるのだと教わる。

ルクラから高校生のガイド、ハクバ君が増えた。彼もこの1月に日本から帰ってきたばかりで、嬉しそうに日本語を使っている。替りばんで負われているカーディン君もようやく私達に慣れて笑顔を見せるようになった。Yさんは



【クワンデを見ながら、山腹を下り、川沿いの旧道に合流する。牛馬も通る幅広の小径】

同じ3才の孫がいるので、彼にかかりを言っぱなしだ。カーディンの母親は2週間前、先にクンデの隣村クムジュンに帰ったとの事だ。3月に三番目の結婚セレモニーを行い、それようやくアンヌル一家は一緒に暮らす事になるのだという。つまりシェルバは足入れ婚なのである。

エヴェレスト街道沿いの点在する集落には、すべてロッジがあり、また、パッティという茶店も並んでいる。その石垣は背中荷を預けられる高さの段になっており、トイレも完備だ。「トイレが近いんだけど」のじさんも安心。ただし、板に穴があいただけの代物で、これが二つあいている物は「連れション」が風習なのかとちょっと悩む。ともあれ済ませたら、傍らの枯れ松葉をかぶせてくるのがエチケツで、この簡単なトイレを移動しては、畠に有機物を梳き込むのが、クンプ流農法のようなものだ。

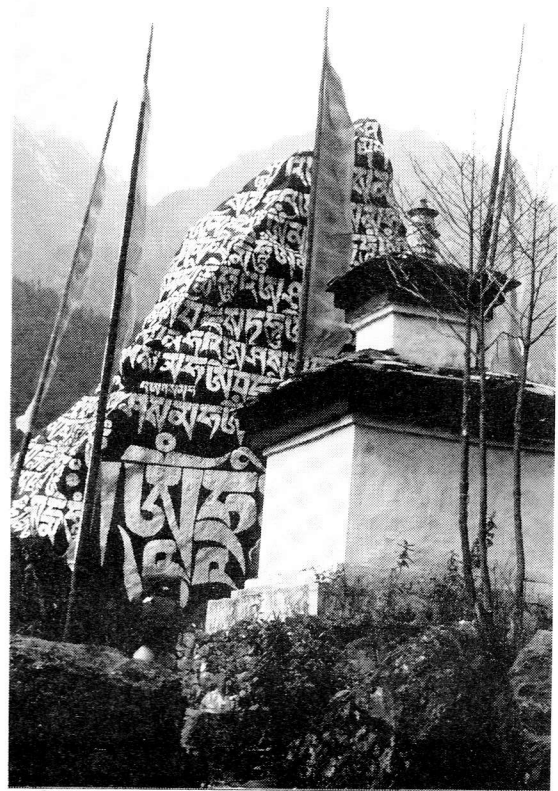
薪の煙の匂いといい、それは幼い頃の日本の風景だった。衰れでもなんでもない。つい40年前までは、こんな風景が、こんな時間が、日本にも流れていた。

ただし、この感傷を交えた懐かしさは、心に余裕のある間だけで、実は不快・不満は鬱積していったのだった。高山病の予防の為に、湯茶をせつせと飲む。必然「夜中に懐電を手に外へ出て、離れた木戸をギーコと開けて」は、寝る前からため息の出る「お仕事」だった。

「早くできるから」でラーメン（ララ）が昼食になった。即席ラーメンに人参、青菜入り。それに、スプーン、フォークが添えられている。この昼食地点ガットからは谷上にクスムカングル（6369m）の雪峰が拝める。カメラならずとも焦点の合わない気がする仰角だ。アンヌルがフーフー冷ましてやりながら、息子にララを食べさせている。お客の前だからという事でなく、穏やかな愛情を注いでいる若い父親。おばさん達が「シェルバの夫、いや婿さんもいいなあ」と、ほほえましく眺めていると、カーディン君も満足一杯の笑みを返した。

クスムカンはすぐ雲に隠れた。乾期のヒマラヤだって、午後は曇るものなのだ。谷間はわけでも陰気になる。表象物にもいちいち感激しなくなる。そんなふうには、路傍の巨石を埋め尽くす経文の浮き彫りにも、葬式仏教程度の信仰の私達には、珍しいの次には「飽きる」がきてしまう。ちなみに、同行の老人は、数珠を片手に「オムマニ・・・」「オムマニ・・・」をずっと唱えっぱなしだ。うーん、真似できない。

先頭のアンツェリンは、さすがにお経ではなく、お気に入りのインドポピュラーの口笛だ。休憩中には、ポータブルデッキのイヤホンで耳



【経文の彫られたマニ石、チオルテン（仏塔）と、ラマ教の表象物が並ぶ道】

にしている姿もあった。表象物の左を通るというルールを、厳守していた訳でもない。シェルバも「今の若いモンは・・・」というのだろうか。じいちゃん、私達がミルクティーを飲む時には薄いどぶろくを口にしていた。彼が、ずっと昔に亡くなった田舎の伯父さんによく似ていたので、わからないと思いつつもここに声をかけてみた。当然わからない早口が返ってきた。そんな老人達と、英語も日本語もあやつれる若者達・・・どんなギャップが出てくるのだろうか。

出国前に多忙だったG氏と、避寒中に足がなまったという老人が遅れ気味で、予定より手前のチュモアが宿となる。腰掛けのベンチにはチベット絨毯。壁には、ダライ・ラマの写真と、タンカ（曼陀羅）の写しというのが、この手のロッジの一般的ダイニングルームのスタイルだ。ナムチェには、西のターメからの水力発電の電気が来ているが、間のとり残された寒村は、ランプのままで客を待っている。

お楽しみのメニューはとなると、人力や牛で運んでこられて貯蔵のきく物、米・粉・野牛の肉・卵、わずかの現地調達野菜からのバリエーションとなる。本日は野菜チャーハンと、発音すると鄙猥語になる為モモというらしい餃子を注文。カマド一つでとなると、できるまでも長期戦だ。ガイド達もキッチンでおしゃべりしながら、料理を手伝っている。

9才という男の子が畠から取ってきた青菜をそろえていた。ちなみにここらの石垣は境界というより、畠を牛から守る為のものだ。そこへやおら牛が帰って来る。日中は出掛けてそこらの草を食み、夕刻にはちゃんと我が宿へ戻ってきて「モー」（帰ったよ！）をやる。そういえば、私達は、シェルパ語も日本語も英語もあやつるアンヌル達にも感心したが、鳥がカーと鳴くのにも感心したのだ。「猫がやっぱりニャーだった」といちいち感心しているおばさんなんて・・・でもそんな些細な事が異国の旅の醍醐味でもある。

G氏はこの宿の隣の子に毎年通う度、奨学金を渡しているとの事だ。本人が優秀なだけでなく、母親がとても律儀な人なのだそうだ。ある時、是非にと請われて心ばかりの夕食を御馳走になったが、ヌードルも、薪も隣から借りているのを見てしまい、それからは通過がてらに手渡すに徹しているという。この美談に「うちの子も」が出てくるのは当然の事で、「年一万円なら」と身を乗り出した私達も、周辺の小波を思っ心ひるんだ。貧しい国への半端な善意は、より多くの人に不満と失意を与えるであろう。旅人は旅人に徹する・・・それが分相応のマナーである。

夜中、アアの「お仕事」に起きた。真っ暗というのに人や牛の気配。あすのナムチェのバザールをめざす人達が、こんな時間にも歩いているのだった。

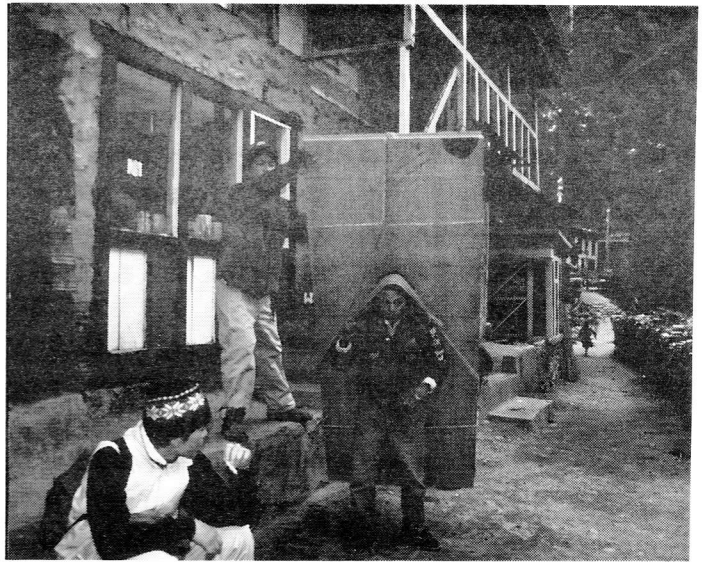
* 2月26日（土）

寒いと思えば雪が舞っている。向かいの小屋横に出ていた水が出ていない。お湯をもらって洗顔。薪も水も貴重品だが、だからといって、どこまで遠慮して、どこまで要求すべきものか、よくわからない。これからまだ奥地へ行くんだから、「もらえるうちはもらっておこうよ」で、身仕度を整える。

すぐに、宿泊予定地だったモンジョを通る。大きな集落だけあって、もの綺麗なロッジも多い。集落の外れにはサガルマータ国立公園の出先事務所があり、ここで入園料 650ルピーを払う。柵にはクンデホスピタルの「高山病を禦ぐ為にゆっくり行きましょう」の注意書きが掲げられている。

谷間の視界は限られる上に、空は灰色の雲。アップダウンを繰り返し、忍忍のうちに河原を歩くようになる。ようやくナムチェへの長い吊橋が見えて来た。

バザール帰りなのだろう、カウベルを鳴らしながらの一隊が下りて来る。ジャガイモ袋は重そうだ。牛は「厭」とは言わないのかなあ、こんな段差のある道でも後ろ脚を見なくて大丈夫



【貴重品の板もこのように運ぶ。左下がH君】

なのかな。柵の中や、檻の中ではなく、大型の生きものが共存しているのがちょっとしたカルチャーショックだ。それだけでも、「人間だけが生きもの」という傲慢さや、「死にたくない」の悪あがきが薄れるような気がする。

賑やかに子供達も下りて来た。ナイキやアディダスマークの衣類にびっくりしたが、チベットから、この手の偽ブランド衣類が入り込んでくるらしい。「ナマステ！」に「こんにちわ！」で返してくる子供達。うぬ、見抜かれたか。世界中のトレッカーを見る彼らの方が、辺境にあっても世界慣れしているのかもしれない。

高いといっても、鉄ワイヤー製なら恐い橋という訳ではない。こんな所にも糞がしてあったから、やはり牛は畜生のレベルなのだ。この橋の欄干にもタルタアがはためいている。

渡れば、いよいよ標高差 590mの急登が始まる。国内のあの山程度と想像するが、体はずんと重かった。やはり酸素が薄くなってきているのだ。北アなら2400mあたりが森林限界。樹林帯になっている為にピンとこないが、実際には3000mの標高でジグザグに高度を上げていっているのだ。

尾根に出た所はトップダラといい、バツティの跡の石垣が並んでいる。K氏ならずとも、白山の高飯場を連想させた。いろんな国の人達が休んでいる。初めての海外旅行がヒマラヤ行きとなったOさんは、「他へ行かんでもいいくらい、世界中の人を見たわ」と喜んでた。ニュージーランド人に「寒いですねえ」（英語で）と言ったら、「昨日までの一週間はずっと晴れてたんだよ。明日から晴れるといいねえ」と日焼け顔で微笑まれた。途中、クンデの村長さんとすれ違う。風格あるご婦人だ。男が出稼ぎをするシェルパの村では、家を守る女が役に就くらしい。顔がわかって、彼女と近況を交わすG氏もなかなか格好いい。

どうにか前方に、白壁の家並が見えてくる。バザールの名残を見たいと、わずかに歩みが早まる。台地では、まだ数人が品物を広げていた。奥地の山上にこれだけの家屋(100軒あまり)がひしめいているのは意外だが、ベストシーズンの11月には、これらのロッジも満杯になり、テントを張るスペースまでなくなるという。土産物店の間を抜け、お宿のロッジに入る。やっと昼食にありつく。

ここの若い主人のアンツェリンも、日本へ研修に来ていた事があり、アンヌルの親友だ。ちなみに、シェルパの名前は生まれた曜日で決まり、何人も同姓同名がいる。旅の間でさえ、私達は4人のアンツェリンに会った。「アンヌルの一番上の姉さんは・・・」「二番目の姉さんの再婚相手の・・・」といった話に同姓同名がからんで来るために、情報が混乱してしまう。私達は「大学生のアンツェリン(私達のガイド)」「ロッジの・・・」「エヴェレストの・・・」と識別する事にした。昼食の間に、カーディンはクムジュンからの迎えに背負われていった。

彼ら若いシェルパ達に、ノートパソコンの使用法を伝授しているG氏を残して、私達は買物に出掛ける。まずは、近辺では唯一のベーカリーに赴き、あれこれを注文し、食べてみる。胡桃入りや、ネパールの小粒の林檎ペースト入りがなかなかおいしい。その後はたっぷり時間をかけて値切りの暇つぶし。

その間も雪は本格化し、白に埋まり始める。わざわざ運び賃のかさんだ物を買う気のない私は、熱がこもらないから、次第に歯の根が合わなくなりだす。同じく震えているOさんと宿に先行。雪はますます激しくなって、見下ろす屋根屋根も真っ白になってしまった。乾期じゃないのけ?!

夕食はネパール定番のダルバード(豆スープ付きご飯)。食べられるうちは何か安心。皆用心して、整腸剤や何やお腹にまつわる薬を持参してきていた。K氏に至っては、駒草会に医師もいる為、2週間前から利尿剤を飲み始めており、特別調合の散薬から、なかなかの健康キットを用意してきていた。

お腹にも、腰にもホッカイロを貼って、羽毛シュラフに潜り込む。ザックやシュラフは3人のポーターが運んでいる。シュラフはロッジに完備でよさそうに思うが、そうでないのは、ポーターの仕事確保の為なのか?

ここのトイレはキッチンのドアを開けてすぐにあった。そして「トイレにも電気がついてるよ!」だった。

* 2月27日(日)

白い屋根屋根の上にタムセルク(6623m)が聳えている。晴れている。コンタクトレンズの容器の中も凍っていた。なんか頭が痛い。高度かなあ、昨日ゾクゾクしたせいかな? Uさん、Oさんも頭痛がしたそうだが、もう朝の散歩に



【クワンデとナムチェ。絵はがき定番のアングル】

回ってきたという。立山でも苦しかった事があると心配していたしさんだが、大丈夫のようだ。昨夜はクンデの村で泊まったアンツェリンがもう戻ってきて「40分で下りてきた」という。それなら今日は楽勝だと、晴天もあって、皆ニコニコ。

ダイニングが2階で、外は屋根雪が落ちてくるからと、これまで目立たない所で荷造りをやっていたポーター君達が、今朝は目前で仕事をしている。頬にも目付きにも幼さの残るガルツェ、ニーマ、ウメスタムの三人は、ネパール語を話せるのみで、サーターのアンヌルからの指示を受けている。このナムチェでも荷物の出入りがあったようで、棒秤で量り直している。復路には、食べた食料分くらいは減ったかと、やわなヒューマニストは安堵したが、彼らは、しっかりジャガイモ袋を増やしていた。往來の機会にちょっとでも多く運ぶのが、彼らポーターの効率なのだ。学力と技術があればガイド、そうでなければ体力のみを売るポーター。もしくは、少数のガイドにあぶれば、やはりポーター。そんな口があるだけ増しといった所か。道中を往來するシェルパは、彼らの知人ばかりだ。ちょっとけたたましい発音の会話の内容は知る由もないが、いかにも「仕事があってよかったな」風の笑みであり、彼らもグツと荷担ぎ紐に力を入れていた気がする。

おそらく体を消耗するシェルパは短命だろう。民族的に頑丈かといえば、例のエリート8名のうち1名位は、恵まれた日本でも体を壊して

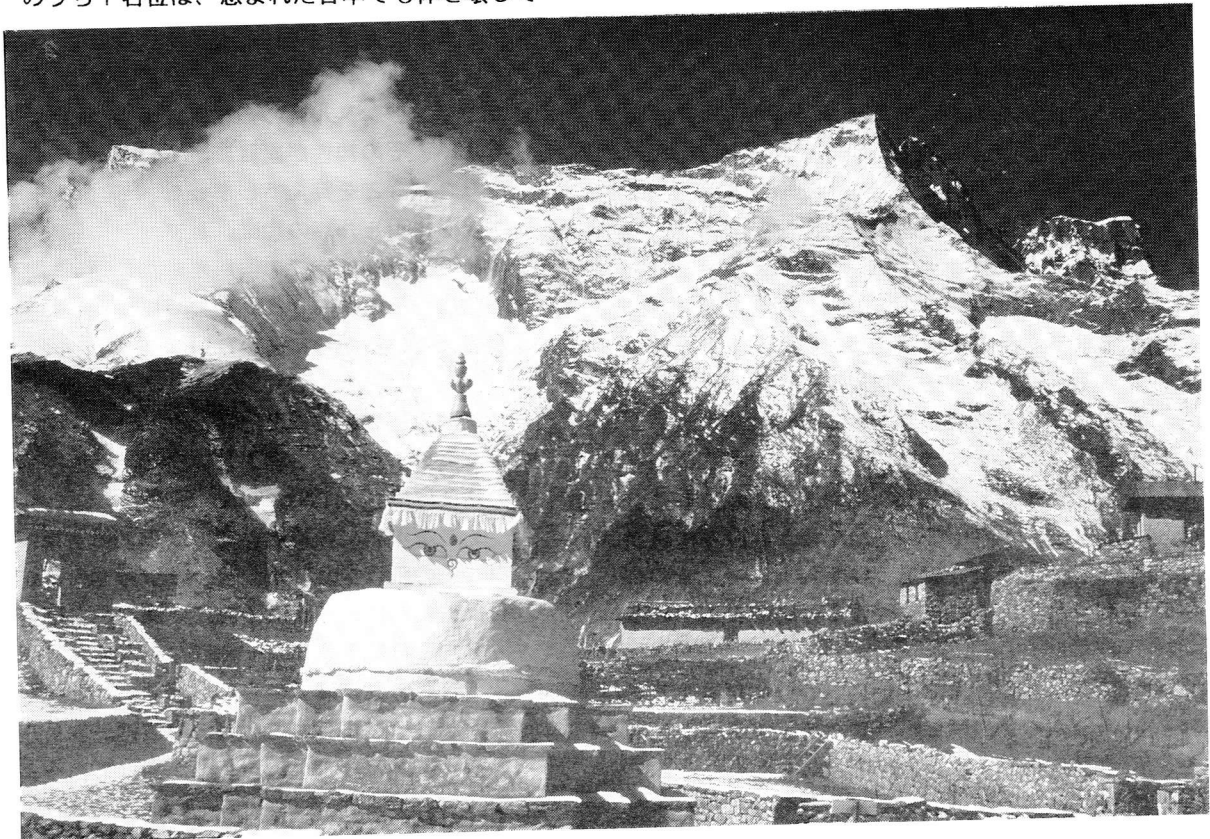
途中帰国となるらしい。つまりは体力のある者が生きられ、体力がなくなれば命を閉じるのがシェルパ達だ。それが哀れな事なのかは何ともいえない。

高地山羊の如き彼らに、私達のような物見遊山が金銭以外の何を残してしまうのか・・・ヒマラヤ・シェルパ・ミュージアムは、一つの提言ではあるのだけれど。

紺碧の空に、白銀のクワンデが映える。新雪で、まばゆい白さだ。ナムチェ・ゴンバ（僧院）外壁の銅製のマニ車をカラカラ回してみる。山上にも岩から岩へロープが渡され、タルタアがはためている。経文を版木で刷った安っぽい布だが、ヒマラヤの空に、風に、ジャストマッチだ。馬蹄形に広がるナムチェと白銀のクワンデがまさに「写真」になり、くたびれ損かと思われたカメラを駆使しまくる。おかげでえらく呼吸を乱してしまった。ナムチェが3446m。今日宿泊のクンデ村は3790m。富士山より高い。が、民家があれば、それは実感を伴う数字ではない。

集落東の丘へ向かう。たかがエヴェレスト、されどエヴェレスト。ここまで来て見れなかったではすまされない。だから、ヌブツェの肩越しにその三角形を認めた時には、おばさん達の歓喜は頂点に達した。「ウソー！、ウワー！」しかいえない貧困なボキャブラリーが悲しい。

誰が4ヶ月前まで、エヴェレストを見る日が来るなんて想像していただろう。キャーキャー



【クワンデと博物館前のチョルテン。蒼と白と石組の世界】



【エヴェレスト登頂のシェルパと
シェルパ二達の写真。彼らには
近所のヒーロー、ヒロイン達。】

騒ぐ私達をアンナル達が嬉しそうに見ていた。

「ネパールには山しかないから」の口調が、自嘲ではなく、お国自慢の響きを持っていたのを聞きのがしてはいない。

この丘の次には、博物館を訪ねたのだが、そこには、歴代のエヴェレスト登頂シェルパの写真が飾られていた。彼らにはよく知っている近所のヒーロー、ヒロイン達だ。だから、「この人は10回も登った」ような超有名人は当然として、裏話から血縁関係から、その後の話から、面白かった。今では最高峰に登頂したぐらいでは有名にならない。無酸素は序の口、24時間でも、16時間でも宣言したり、シェルパの民族服のまま登ったり、王様の服で登ったり・・・何かとパフォーマンスがいろいろあるらしい。その右には外国人登頂者のコーナーがあり、田部井淳子、植村直巳の写真も貼られていた。

「たくさんの人登りに来てるけど、みんなシェルパのやった仕事。シェルパが道作って、ロープ張って案内する。これ、シェルパだけで登った時。シェルパはお金がない。だけど、シェルパの力報せたくて、登山隊作って登った。今度はシェルパの女の人達だけで登るよ。この写真の人達。この人が私の友達。」

日常にいくらそこに見えても、何日ものキャンプには費用がかかる。まして働かないという贅沢も許されない。シェルパの彼らには「外国の登山隊に雇われ、あのエヴェレストに登る」・・・それが最高の夢なのだ。気配りは細かいけれど、余計な事までは話さないアンナルが、附かれたように話し続けるのを聞いてそれがわかった。

ちなみに、エヴェレストの登山料は7万ドル。税收の為の国民の把握などまず不可能であろう政府には、ダントツの歳入である。いかに辺鄙であろうと、カトマンズが都会であろうと、クンプには世界が憧れるエヴェレストや、神々の崇高な峰がある。そこへは自分達シェルパの

みが案内できるのだ。ポーター達を指図し、客の体調・力量を見極め、チーム全体を采配していく。極限状態にあっても客をたて、客の夢への努力を惜しまないのがシェルパであり、それが誇りだ。ネパールヒマラヤはそんなシェルパとセットになって、歴史を作ってきたのだ。

「人集めて、ビッケルやアイゼンも皆そこへ集めて神様にお祈りする。『無事に登らせて下さい』って。それもサダーの仕事」と語る彼は、夢あふれる青年だった。彼自身は6000m級までしか案内したことがないという。ガイドの口を待つしかない一方で、一番シェルパの血が騒ぐのもやはり「ガイド」なのだった。

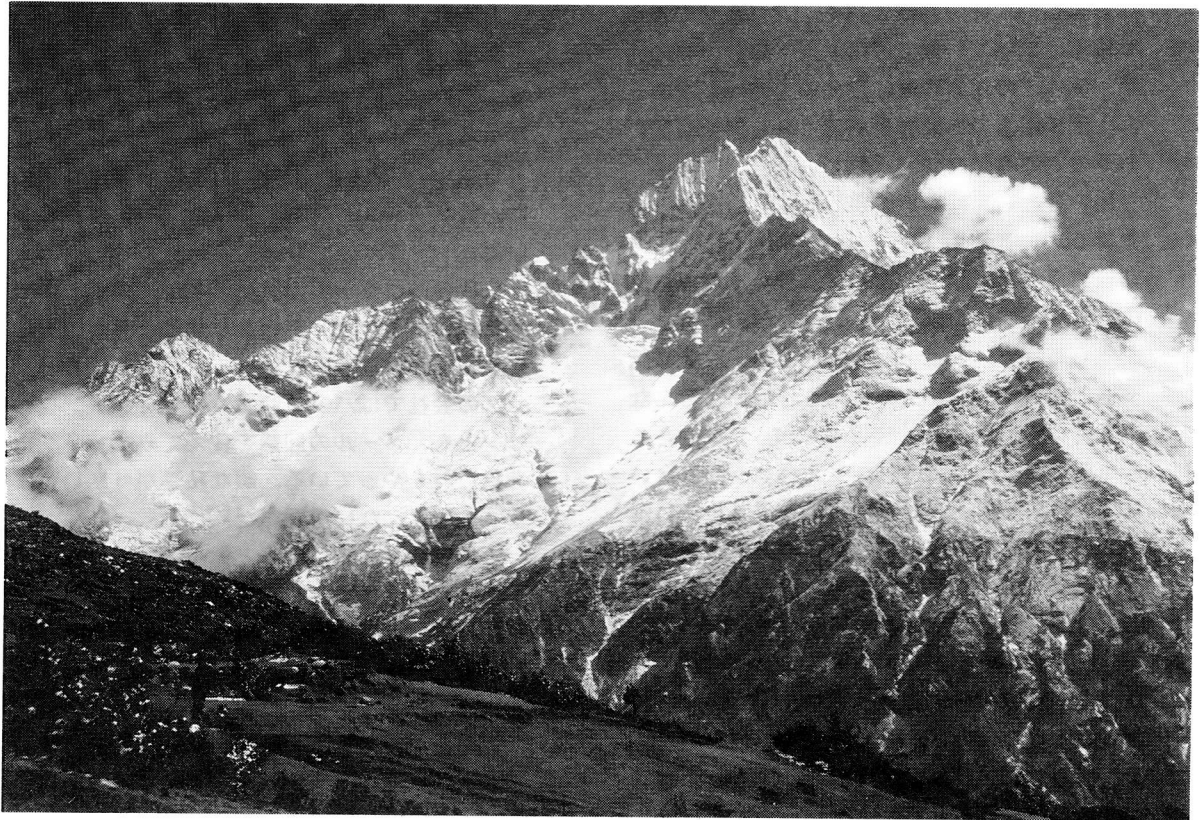
星野道夫の「アラスカ 風のような物語」には、教養をつけたばかりに、イヌイット古来の生き方もできず、さりとてアメリカ人にもなれず、自殺していく青年達の事が書かれている。だから、アンナル達の知性と、環境がわかってきた時、その知性が裏目に出るのではないかとやりきれなさを覚えてしまった。

でも、シェルパの血は、ヒマラヤに燃えるみたいだ。そして、この国が穏やかに過ごしているのは、そんなふうに、あまりに神々しい峰々が聳えているからに違いない。

午前の逆光から抜け出したタムセルクはヒマラヤ壁もくっきりと聳え立つ。3000m分の岩壁の高度感は「すごい」のみ。

そこを不粋に横切るのはホテルエヴェレストビューの飛行機か？まだその手がある。しかしG氏によれば、一気にそれだけ高度をあげると、2、3日はフラフラで動けないから、登って馴らした方が結局体の為との事。ただ、帰路は心配がないから、単独行の時の彼は、ホテルに頼み、復路の空きがある時に、帰っているという。

キラッと目を光らせたのはYさん。「私、ヒマラヤに惚れちゃった。今度は孫を連れてくる



【真近に嘘のように高峰が聳え立つ。タムセルク6623m。】

。私だっていつか死んじゃうんだから、『おばあちゃんと一緒にエヴェレスト見たなあ』って思い出を残しときたいの」ちょっと年上のUさんは「何言ってるの。孫は私物じゃないんだよ。何かあったらどうお詫びすんのよ」。そこへアンヌルが、不調を訴えられない幼児が、到着後死んでしまった事例を話す。微笑んでくれる自然ばかりではない。

登りつめた所がシャンボチェ飛行場。ここはホテル専用の飛行場で、上のホテルまではさらにポニーが運んでくれる。その端にあるロッジで昼食。

我孫子からだという日本人が先客でいた。3週間の休暇で、ガイドに丸々のお任せで、行ける所までの旅だという。今日は高度馴化で、ナムチェへ戻るそうだ。その彼が「おれさあ、ひどい話聞いたんだよ！」と語るには、ゴーキョへ行った日本人学生がガイドにおいてきぼりにされ、手持ちの食料もない状態で凍死寸前を通りがかりに救われたという。要するに、彼はガイドに丸々お任せだが、きちんとしたルートでまともなガイドを紹介してもらふの肝心の所は押さえたという主張らしかった。信憑性はともかく、M氏、G氏、G氏のルートがあるツアーで来ている事が、今回の旅の楽しさになっているのは確かだ。

食事中に湧きに湧いてきた雲はタムセルクどころか、頭上を厚く覆い始めている。早い時間に行動すべきなのはヒマラヤも一緒だ。

その飛行場から、北西へ小高い丘を越えるとクンデ村。シェルバの聖山クーンピラの麓の平坦地に、クンデ村、クムジュン村は位置している。前者にはクンデホスピタル、後者には小学校から高校までの学校がある。共にヒラリー卿の寄付で建設された。だから、シェルバのロッジにはダライラマの次には、ヒラリー卿とテンジンの登頂写真が懸かっているのが当たり前。彼はシェルバ達の生き神様だ。そこでG氏も伝家の宝刀の如く、ヒラリー卿のサインを大事にしている。「これが目に入らぬかあ」がやれるかは、今後のお楽しみだ。

まずアンヌルの家を訪ね、休憩する。このあたりでは豪邸だ。大黒柱ともいうべき、中央の太い柱に、銀製の茶器セット。廻りの戸棚には少しずつ貯めたであろうカラフルな寝具類。職人に頼んで造るという、浮彫りのある角テーブル。

末子の男子相続のシェルバだから、上に三人の姉がいるアンヌルがこの跡取りで、3月には最後の三度目の結婚セレモニーが行なわれる。これをやらないうちは正式ではなく、やらないままのカップルもあるし、その意味では離婚は容易というか、特別視される程の事ではない。男はガイドや、出稼ぎで長期の不在だし、女は家やロッジ、ジャガイモ畠を守っているが、足入れ婚というように女は実家にいる訳だ。だから、財産の、生活の、とあわてる必要がない。正式な結婚ができるのは裕福の証でもある。

彼の場合、妻が隣村の為、さらに大がかりになるらしい。妻の親族を招く。次に自分の親族を招く。ついで、妻の村の人達、自分の村の人達、妻の上の代の親戚、自分の上の代の親戚と、1週間以上のお披露目が続くらしい。仏間にもその為の酒類が貯えられていた。

強い絆といえいいのか、ゆすり、たかりのセレモニーといえいいのか・・・そんな事の為にバラバラに暮らして稼ぎ、貯め、飲み食い、に散財なんて虚しい。さらには、祭の当番というのもあって、それも大散財との事。G氏の話では、当番による心労死もあるらしい。こんな厳しい自然の中では「共同体を守る」が生きる知恵なのであろう。それが支え合い、助け合いならいざしらず、たかり合いにシフトしているらしきは愚かだ。彼の結婚も、村人の難癖で遅れ、二番目の娘も生まれた今、ようやく三度目のセレモニーとなったとの事だ。

シェルパの娘と日本人の結婚は、よくあるようだ。因習に縛られる事なく、富を実家にもたらししてくれる。同じ顔立ちの人種の、平和で豊かな国日本。異国へと離れる寂しさを越えて、女の成功は「日本人との結婚」であるようだ。

「成功者」と呼ばれる層ができ、建前と本音が軋み合っている。シェルパの社会はこれからガタガタと変わっていく事だろう。

私達の泊まるロッジはクンデホスピタルのまん前にあった。なにしろ標高3790m。陽が陰ってからというもの寒くておれない。

ところがロッジの女主人は、ストーブのつけ方を知らないかの如く、何もしない。多少はあたる真似とかのデモンストレーションをしてみたが、おざなりにストーブを触るだけでひっこんでしまう。おまけにトイレというのがとんでもなく遠い。一番寒い所へ来て、向こうの畠の端なんて、まさに頭痛の種・・・どころか本当に頭痛がしてきた。



【集落口にはチョルテンが立つ。石垣に囲まれているのはジャガイモ畑。聖山クーンピラの麓のため水が得られる。】

これまで気配り満点だったアンヌル達も、私達が寒がっているのがわかる筈なのに動かない。ようするに彼らの村だからだ。薪や糞は貴重品。だけどタダで泊まっている訳ではない。私達もG氏や、アンヌル達の立場を思っ（やってられないね）の目配せをしながら我慢していた。肩がすくんだままこわばってしまったくらいだ。

G氏の方はクンデの丘を越えた途端、水を得た魚の如くいさぎとなりそれこそ暖房もない収蔵庫と、ロッジを行ったり来たり。カトマンズの会社ではパソコン番をやっているアンツェリンとも、メールの回線を変えてみたら？や、あれこれをやっている。暇な私達が「寒い」をますます言えない雰囲気だ。

「一寝入りしてくる」と休んでいたUさんが、表情がぼやけてむくんできたみたいだ。こっちもうつむくと、動悸を打つがごときガンガンに、目の奥まで同調する。風邪か？いよいよ高山病か？

夕食時になりようやくストーブに火が入る。ジャガイモ料理が並んだが、全く手が出ない。この時食欲があったのはG氏とK氏とYさん。あとはお湯だけを飲んでた。外はまた雪が舞っている。

夜中、フラフラ、かつ腹も立った私達はトイレまで行かなかった。「やっちゃえ！」

* 2月28日（月）

寒さと不調で眠れなかったらしい隣から、早々に話し声が聞こえてくる。Uさんの顔のむくみがひどくなった。私達も腕時計がきつい、指が握れない・・・とむくみが出ている。今日は周囲の散策だから、Uさんは出掛けずに待っているという。

すぐ後ろが病院だから、一度見てもらおうとなった。先客に怪我人がおり、呼び出してもら



【クンデホスピタル。
石垣平屋造り。近辺
唯一の貴重な医療施設】

【右より、ナムチェで借りた
羽毛服に身を包むK氏と、
クンプ協会代表のG氏。
装備・衣類は、カトマンズ、
ルクラ、ナムチェなどで、
購入・レンタルが可能。】

っての診察をうける。結果は、指先で測る血中酸素濃度が、同行したYさんの半分。直線の上をまっすぐ歩けない状態で、即刻の下山となった。ナムチェから頭痛がしたという、それより下まで下がれという指示だった。ボランティア経営のここは、診察は無料。薬のみ有料のシステムだ。

結局、エヴェレストビューのポニーを回してもらい、馬方、アンツェリン、ポーターの3名がついてモンジョまで下山と決まる。ポニーがくるのも遅かったし、乗った事もないポニーで下りられるかも心配だったが、さりとて代案はない。

後で無事合流してからの話では、ナムチェを通過したあたりでグツと体は楽になり、乗馬の方もローレンローレンのメロディーがうかぶ程に快適だったという。「話の種が増えたね」と喜べてよかった。この費用は5000ルピー、1万円だった。ポニーに乗って来る手もある・・・Yさんは、孫との夢をまた蒸し返しているようだった。

そうやって、Uさん達一行が石垣のかなたに消えてから、G氏はさらにメール開設に励み、私達の方は散策に出る事になる。まず、G氏と仮設事務所まで同行する。暇なロッジの1室を借りているという事になるが、その部屋に専用の電話回線が引かれ、ミュージアムの収蔵品の一部が置かれている。あとの品は持ち主の所に置いたまま、「登録」で収集しているという。1点1点にラベルが貼られ、何軒かの家を見てきた私達も、まあ生活道具の収集とはこんなものかなと思う。これらをこなしているのは小学校のバッサン先生だ。

G氏によれば、シェルバにはボランティアという概念がなく、彼は極めて珍しく、貴重な存在だという。私はむしろ、「ボランティア」の贅沢さに気付いた。まず、給料がもらえるような人でなければ、そんな時間の使い方はできな

いのだ。志以前に高い障壁がある。G氏の夢と、シェルバの現実と、どこまでオーバーラップできるのだろう。

ミュージアム建設予定地は、クムジュン村からの要請で、クムジュン寄りの両村の間、つまりは、どちらからも離れた場所になった。つまりは、ポツンと離れた1軒家だ。それで常駐できるのか？電気、水道、薪のライフラインは？折り合える給与の額は？はてなマークが点滅する。

クムジュンから、三々五々子供達が帰ってくる。ここではお昼は家で食べ、また午後の授業を受けに行くのだという。となれば、この距離感は違うのかも？やはり多くがスポーツブランドの防寒具だ。

平屋の石垣の校舎に着く。写真で見た大型のチョルテンはここのグラウンドに建っている。校長室に招かれる。寄付のつもりはあったが、当然のように寄付台帳が最初から出てくると、ちょっとつかえるものがある。帰国して、復習にガイド本を読んでいたら、カーストの残る国では、「富める者が、貧しい者に施しを与えるのは当然」という考え方があり、乞食も堂々と物乞いをするといった。ともあれ、台帳に記名してお金を渡したら、それでおしまい、鳩が豆鉄砲のような顔で出てきた。

まあいいわで、教室をのぞいてみる。入り口横に黒板があり、壁沿いにグルッと長椅子が置かれているだけの空間だ。学研の先生でもものをいえば、日本は飾りたてた施設を持っではいるが、子供は不登校をするし、家の手伝いもしない。それでいて「生きる力」をスローガンにしている。環境の貧しさと教育効果は、むしろ逆相関かもしれない。

そこから、イエティの頭皮があるというゴンバへ廻る。ここも当然寄進である。ただ、私達は寄進の後、疑わしい代物を見せてもらったが、ガイドを連れていなかった白人グループは、身振りだけで判明した寄進だけして、そのまま帰っ



【学校も平屋造り。昼食から戻ってきた子供達が、わずかな昼休み時間を楽しむ。乾期の冬は降っても乾いた雪のため、子供達は防寒具にスニーカーのスタイル。】

てしまった。

また雪が舞いだす。服に附いたそれは見事に大型の六華だった。見惚れた後にはブルブル、ガタガタ・・・さあ帰ろう。

ロッジに日本人夫婦がいた。というより「日本語お上手ですね」といったら、「日本人です」と言われた。彼らは、夏は北アの山小屋でバイト、冬はネパールへ来て登山というライフスタイルを繰り返しているという。6000mに一座登り、二つ目の6000mの前の休養中だそうだ。「すごい」と感心したら、「シェルパがみんなやってくれるから。ロープ伝っていくだけのあんなの、登山ですかねえ」という。それでも、登山許可はシェルパともきちんと契約にしないと、おりにこないのだそうだ。

夕食は注文せず。持参したおかゆとカロリーメイトですませる。「Uさんが元気にモンジョ着」の電話が入る。よかった。

シェルパの男達がロッジに集まり始める。G氏は、交流会のつもりで声をかけたいが、彼らの方はミュージアムの協議のつもりで出てきたい。そうであろう。いつ建つのか、運営資金はどうなっているのか、誰が現地責任者をやるのか？どんな準備機構をもつのか？わからない事だらけだ。

G氏の方は、建物やお金だけをぼんと出し、後は知らないというこれまでのようなやり方ではなく、現地の盛り上がりこそを待っているのだという。建物が先ではなく、盛り上がりの結果が建物である事が夢なのだ。

それは理解できる。だが彼らの側に立てば、建物が建たなければ、現実の話と受けとめられないであろう。異国の気紛れ人がいつポツと来なくなって、話が立ち消えになるか。まず、建物が建つ事が順序であろう。メールを開設しても、建築計画がぼやけたままでは、何を情報交換する事になるのか？たかがOB会でも、何重

もの手を打って、やっと何分の一かが実現といった所だ。盛り上がる前に醒めてしまう、うやむやになってしまう事の方が断然多い。

彼らの言葉はわからないし、交流より、協議が優先だ。先に寝る。協議の最後は酒宴になったようだ。

* 2月29日（火）

一面の雪。とうとうクンデでは山を見ずじまいだった。一昨日の景色を、もう少しアップした程度と慰められる。

帰りはハクバの家に寄る。日本へ行くと家が建つ・・・のとおり増築中だ。彼の姉は日本人と結婚して魚津にいる。その為の結婚書類はG氏が運んだのだそうだ。母親がこの完成間近の家の写真を撮って、娘の所へ送ってほしいとばかりに頼んでいる。こんなに日本とつながっているなんて知らなかった。クンプに限らず、カトマンズにも、日本語学校があり、日本と関わる事は、成功へのステップと見做されているようだ。

村を見下ろす丘に結わえられたカタの列が、バリバリに凍っている。ハクバ君の所で掛けてもらったばかりのカタを、そこへ結びつけた。また、ここへ来るよ！そう、これが最初で、きっと最後だと思った景色はいくちもある。なのに、「〇年ぶりだ」と、村を見下ろす自分が容易に想像できた。日本からネパールはあまりに遠いのに、逆のここからは裾広がりに世界につながっていきそうな気がする。貧しくてもここはやはり世界の屋根だ。

ところで、高山病で登りになると遅れ気味になった私は、重いカメラザックをアンヌルに持ってもらった。空身なんて、おそらくワンゲル1年生以来の事だ。その後は、後輩の面倒をみたり、子供に気をつかったり、メンバーの体調に心砕いたり、こんなお任せなんて身分になっ

た事がない。楽だあ。こうやって少しずつお任せに戻っていくんだろうか。

景色はろくに見えない上に、寒くて寒くて、ただただ早く下りたいの一心で歩く。バザールの日でもない今日は、ナムチェの多くのロッジも閉じられたままで閑散としている。そのうちのアメリカ帰りというインテリ主人と、G氏は情報交換をしている。こちらの電話回線は、12本。すべてシャンボチェへ集めての衛星中継になり、その為か彼のメールもなかなかつながらないという事らしい。

実は、クンプからの初メールの、次の次くらいには、奥名会長へのメールを予定していた。OBスキー合宿の皆様にもそう通知してはいたが、「電話回線があれば、次はメール」の図式にはならず、空振りに終わってしまっていた。もっとも、「サムイ。アタマイタイ。トイレ、トオイ」と、碌でもないのが届いたような気もしないではない。

吊り橋まで一気に高度を下げていく。女性の方がすねているカップルもいて、やはり辛い難所だ。ヒマラヤはガイド、ポーターがセットのものと思い込んでいたが、欧米系には現地人を雇わず、長い足で颯爽と上がって行くグループも多いようだ。道は迷うはずがなく、集落が点在し、英語も通じる。Uさんの件では、やはりツテが必要とは思ったものの、「標高の高い東海道」といった解釈ができなくもない。アルプスやロッキーを眺めながら高地を歩く・・・島国日本にはないジャンルがトレッキングであって、彼らの方が場慣れしているようだ。とはいえ、あんなトイレや、油が鼻をつくようなメニューに彼らは我慢できるのだろうか。「見たい、知りたい」と「我慢」を天秤にかけたら、食べられなくなった時点で、限界だった。白とグレイの世界に同調して、全く気落ちしてしまった。

バグディンの宿で、すっきり顔のUさんに合流する。この宿はストーブが暖かく燃えている上に、2階には水洗トイレまであって感激した。それに、夕食をやっと食べたいという気になり、しかもそのラーメンをおいしいと感じた。「我慢できない」や「気落ち」がすうっと抜けて、ああ、じゃあやっぱり高山病だったんだと納得する。もっと時間をかけて馴らして行けば、ゴーキョやカラバタールも夢ではないかもしれない。

ここまで来ると、電気がついて当たり前だ。ヒマラヤに憧れていながら、ホッとしてしまう。旅は出るのが楽しい。そして、戻るのも嬉しい。

* 3月1日(水)

今日でお別れと思い、ポーター3人と写真を撮る。どこで寝たの?と聞くと下手の物置のような所を指差した。ガイドのアンヌル達は部屋で寝たり、キッチンの端で寝たりもしていたようだし、食事はキッチンで、客の分の料理を運び終わったら取っていた。ポーターの方は朝になったらどことなく現れ、昼間はいないし、宿に荷物をおいたら消えてしまう。つまり、ガイドは「人を雇う」事だが、ポーターは「荷物の移動作業のみを買う」イメージだ。

今日は登りでルクラに上がる。標高が下がった点では体は楽になったものの、蓄積疲労の方がたまってきている。歩かなきゃ帰れないんだから、歩きましょうで、ロッジを出た。

そんなのたり歩きでも、お昼になり、サンルームをもつロッジで足を止める。用心が先立っていたメニュー選びも、ここでしか食べられない物を食べておかなくては・・・になった。首を傾げてキッチンに消えたアンツェリンが「できるって」の返事。それから・・・遅いの慣れてきた私達でも、どうかと思うほどに、出てこない。そこはキッチンを通らないとトイレに行けないから、替わりばんこの情報が入ってくる事になるが、何しろ、ロッジの主人が一人だけで、三人の私達のガイドがせっせとパイ皮作りから始めていたのだった。「できる」というのは、「用意してある」ではなく、「粉から作り始める」という意味だったのだ。今さら取り消しもできず、体が冷えに冷えるまで待った。

ようやくの焦げ目のついたアップルパイは、だから感慨物だった。「すごいね。パイだって作れるんだね」と言うと、ニコッと「カトマンズでは、何でも作るよ」の返事。彼らの方は、これから自分達の分の食事作りだ。とても待ってはいられなくて、先に歩かせてもらった。ネパール修業が足りない、反省した一コマだった。

そんなふうに私達の方が食欲旺盛になってきたのに反し、H君の方は食べられなくなっていた。都会っ子の彼には、連日徒歩の毎日が、初体験といった所で、若さでのカバーも限界に来ていたのだろう。

帰りはもっと暖かいだろうと話していた道が、白とグレイの世界になっている。G氏は「三月に、こんなに悪天が続くのは珍しい」と慰めのように言う。珍しい花ならともかく、こんな珍しいは願い下げだ。のどかな田園風景も、陰気な寒村にしか見えない。やはり、住むのはたいへんな事だ。

やや先行気味に歩いていたYさんは、G氏にカマを掛け、シェルパから、嫁さんを勧められているのを聞き出していた。そうであろう。しかし、クンプに住めば、彼はシェルパにもなれず、日本人の経済的基盤も失う。では日本でとなると、農家でもない彼にはシェルパニがベストチョイスになる必要がない。

ボランティアの粹を少しでもはみ出ると、本音から、現実からが押し寄せる。知れば知る程垣根もより見えるようになる。難しいものだ。

ついにチョルテンの前に着いた。最初に物珍しく眺めた町並を、「着いた、着いた」で通るのはフィルムが軽快に巻き取られていく感じた。そして、ついに最初にミルクティーを飲んだロッジに着く。やったー！ここが、クンプ最後の宿だ。

ポーター君達とはここでお別れだ。彼らはルクラの下部落が家だという。私達は余ったお菓子を全部彼らに持たせた。「ありがとうね」ところが・・・ところがとっていいのか、結局そこであと2晩滞在する羽目になった私達は、所在なげにポケットに手を突っ込み、飛行場にたむろする彼らを、ずっと見る事になる。稼ぎを手に、走って家へ帰ると思い込んだ私達が数段甘かった。私達の乗る飛行機がこなかったという事は、彼らにも客はずっとこなかった。飛行機が峠を越えた合図があってからでも間に合うであろうに、その間遊ぶでもなく、談笑するでもなく、時折石をもて遊び、いよいよ欠航と決まると消えてしまう。もっと夢を見、勝手を言ってもいい15から18才の少年達が、「ただただ待つ」の運命の中にいた。胸が痛んだ。

下山は嬉しいが、それは別れの日が迫っている事でもあった。私達は、それまで食事に同席する事のなかったアンヌル達と、豪華な晚餐を共にする事にした。ローストチキン、スプリングロール、モモ、ミックスピザ、チキンカレーを3皿ずつ取り、山分けし、解禁のビールもつぎ合った。「かんばーい」。

儀礼ではなく、また来る事があるであろう。そうでなくてもG氏を通じて彼らの情報は入る。Yさん達ばかりではなく、私も「生きる」を考えさせられた。ミレニアムに相応しい旅だった。

* 3月2日(木)

飛行機に乗り込み、ジ・エンド・・・にはならない。さらにネパールを知る後半戦が待っていたのだ。

明ければ、春霞だ。悪天にも耐性がついてしまった。予備日があるんだもの。木曜開催のルクラのバザールを楽しんでいこう。



【これは野牛の肉。貯蔵用にはチベットからの乾燥腿肉があり、壁に掛けられている。】

下の広場に人の群れ。「やってるよ!」。香辛料、豆、肉、卵、穀類、衣類、金物などが広げられ、賑やかな駆け引きが始まっている。ここはさすがに「エン」をいう者はいないが、ドル換算の為の電卓は必携である。そしていろんな民族がいるのも分かる。中でもチベット系は眼光鋭く、鼻輪などの装飾が不気味で、ちょっとおじけづく。原形をとどめているような大肉塊も圧倒的だが、「物を食って生きる」が素直に入ってくる光景でもある。Yさんなんかは言葉もわからないのに、「まけろ」をやっているおばさんの横にしゃがんで「まけてあげてよ」と加勢している。この場はアンツェリン達に任せるしかない。それにしても「これは高い」「絨毯はここの方がナムチェより安い」「あっちが本物」「これはすぐ破れるよ。トレッキングの間だけ使うならいいけど」と、よく物を知っている。K氏とOさんは「2枚で」でチベット絨毯を値切り、Yさん、UさんはTシャツを買った。駆け引きが昂じて、ロッジに戻った途端、「こんなの着たくない。誰が着てくれるかしら」になった人もいたが、黙って籠に入れるのとは違う、張りのある買物だ。

ガスはますます濃くなり、そのまま午後になってしまった。諦めて、ルクラ唯一の映画館に入る。25ルピー。ようやくカラーとわかる程度の白々画面は、インド映画のはちゃめちゃ・・・例の活劇あり、唐突にヒーローヒロインを先頭の群舞ありのタイプだ。それが突然切れて、途中から映し直し。またも切れて、本日おしまいと追い出された。店をぶらぶら覗き、帰ってトランプで時間潰し。粗末な雑誌を手に取り、ネパールではどんな品物を宣伝してるのか、どんな顔がスターなのかを研究。先月のハイジャック犯人が表紙になっていた。

やっと夜になる。何度打ち上げをやってもよいではないか！ただ、G氏は「アンヌル達は向こうで食べた方が」とチラと言った。なごり惜しいUさん達は「一緒に食べよう」と言い、そうした。恐らく彼らは、客とシェルパのけじめへの周囲の目を気にしていた事だろう。好みも食べたい量も違ってはいたに違いない。それでも「客」を立てて、客のヒューマニズムにつきあっていた。

いろんな場面で、本当はどうしたら？があった。彼らが本来の青年らしく見える時もあれば、ある種こわばっていた時もあった。それはむしろ同族の目があった時のように思う。客、ガイドである自分達、周囲の同族の位置関係に、場面毎の気配りをしていた。そうでなければ、シェルパ社会では生きていけない。

昨日で終わりだった筈の羽毛シュラフに潜り込む。まあ、予備日だったんだから・・・。

* 3月3日（金）

窓から、対岸の峻峰が見える。いよいよクンプとお別れだ。この天気 wait していた人達が曉の散策に出ている。クワンデのモルゲンローテ。来る時より白くなっているのはあの寒さのせいだ。存分に目に焼き付けておかななくては。

アンヌルから搭乗券を受け取る。グルカのセカンドフライトだ。飛行場も人が行き交い、活気にあふれている。みなが南の空を見上げている。昨日だけでなく、その前日も飛んでいないのだ。

待望のサイレンが鳴る。ラムジュラ・ラの峠を越した機影があると、このサイレンが鳴る。それから10分たらずでかすかな爆音が聞こえ、蚊のような機影が現れるのだ。目のいいアンツェリン達は見付けるのも早ければ、会社名の判別も早い。イエティ、シャングリラ、そしてグルカ。エンジンを止めるのも惜しいように、飛び立って行く。

「俺達の飛行機は速い」。速いとは、26分で飛んでこれるという意味だ。ヒラリー隊のキッチンボーイをやっていたというロッジの主人とも、いかにもやり手そうな女主人とも、いよいよお別れだ。

いそいそと日溜まりのテラスを出立する。小さな飛行場のチェックは「ライター・モッティルカ」を聞かれたぐらい。搭乗便が決まっているからには悠然でもよさそうなものを、1cmでも前への心境で並ぶ。

飽きる程、南の空を眺めた。カトマンズに霧が発生しているようだ。クワンデがまぶしい。でも、徐々に昼の雲に隠れだしている。早く来てよ！

ようやくのサイレンが鳴る。どこのだ？固唾をのんで見守る中、白にグリーンラインが掛け上がってくる。「イエティ！」歓声が上がる。

そして、飛行場は再び人声だけでもどった。管制塔からは何の情報も出てこない。アンヌルがカトマンズの社長に連絡をとる。それでカトマンズの情勢がわかる・・・そんな個人ルートに各自が頼るのみだ。だから、「カトマンズ空港は閉鎖された」の情報は、ほかのガイドの報告から漏れ聞こえてきた。客達が帰り始める。まだまだ日は高い。もうやめたなんて、怠けた国だ。

すくすくロッジへ戻る。カトマンズの日本料理店へが、またクンプ食だ。明日の夜には帰国便に乗らなければならない。G氏達は最悪の事態に備えての対策を講じ始めた。

「なんて国や！」こちらもつい悪態が出る。個人が連絡をとれるくらいなら、管制塔も「何社の飛行機が出た」とか、いくらでも情報をだせるであろう。それなのに何もしないし、誰もそうすべきと言いださないのか？善処の末の欠航ではなく、この程度のいい加減さで「やあめた」をやっている気がしてならない。

客の苛立ちにアンヌル達は、カトマンズからの電話を待ちながら、黙って視線をずらしている。天候の悪い時、彼らは四日かけてジリへ下る事もあるというし、飛ばないのはそれなりの日常茶飯事なのであろう。客をなぐさめる程器用ではない彼らは、こんな時は黙っている。

なぜかサイレンが鳴った。しかし何も飛んではこなかった。

律儀に、私達を見送ろうとしていたハクバが、いよいよ出立するという。途中にも何度か「遠いんだから、もう帰って」を言ったが、「大丈夫」と、にこにこしていた。「帰ったら何をするの」と聞いたら、「学校へ行きます」の返事。そう、彼は高校生だった。

ホテルのバスで一汗流して・・・もバーになった。「ホットシャワー浴びよう！」一人 200ルピー。もう口数も少なくなってきたH君がトップ。「いやあ、気持ちよかったスヨ」と気が晴れたという顔。次私。階段を下りれば、寒々の1坪ばかりの土間。細々水量を一旦止め、リンスをやっと流して出る。ぬるいか？程度ではそれ以上いられない。次のYさんは「水しかでなかった」で、次のOさんは服を脱がず足だけ洗ってきたという。根性のUさんは「ちゃんと払ったのよ！」と交渉してお湯を沸かしてもらい、それで拭いてきたという。体が温まってくると、これも笑える話ではあった。

さっきのサイレンは、業を煮やした客達のチャーター機のものだったらいい。峠までは来たがそこから引き返したそう。こんな場合は、まともに1フライト分を支払わねばならず、あせりが丸損の結果となるそう。ルクラから下りられない私達もあせっているが、カトマンズに待機する人達も、到達目標がじりじりと下がる苛立ちに、いても立ってもいられない気持ちであろう。

そうか、チャーターという手があるのか。そういえば寒風に立つ飛行場に、アメリカ人夫婦の為に飛んできたヘリがあった。あの時はとんでもない贅沢と思ったが、明日になったら、あえて贅沢の手も考えなければならない。

G氏から、「大本营発表」。明日のグルカはファーストフライトを押さえた。それが飛ばない場合、ヘリをチャーターする。費用は、飛行機のキャンセル料、ホテルとロッジの差額、片道も希望客を捕まえる事で、そう高くはないという。ヘリの居場所もあたってくれているらしい。もう市内観光だってどうでもいい。帰れさえすれば。

開き直ったというか、一安心したという所かトランプで暇潰しをする。アンヌ達もホッとしたようにゲームに加わる。たかがトランプだが、彼らは頭がいい。ルールをスッと覚えるばかりか、すぐカマ掛け側に回る。日本に生まれていればさぞやの可能性を手にしたであろう。

歌ったり踊ったりなどの客相手のできない彼は、話す事がガイドの仕事になると分かったらしい。富山での思い出、シェルパの風習、自分の家族の事……。先の多くの情報は主にこの時間聞いたものだ。立山ケーブルの除雪を日本人グループと競争してやった事、会社のトラックを無断借用してスキーに行った事、「ネパールの研修生」といえばただ乗らせてもらえた事、大阪の女性との淡い恋……。羽根を伸ばした研修時代の思い出は特に笑えた。そんな自由を味わったあと、彼らはどんな想いで自国を眺

めただろう。

「俺達の国は貧しいから……」何度もそのフレーズが出てきて、こちらもせつなかった。私達は「国」が自分を拘束するもの、生き方を決めるものと意識した事がない。それこそ、自分さえ、発想を変えればここへ来る事だってできた。「死」がちらついて「生き方」を考えさせられたものの、その「生き方」にどれほどの自由が与えられているかも、気付かずにいた。

自分がどれだけの物を手にしているか、井の中にいてはわからない。旅は贅沢。でも一度きりの人生。「見たい」「知りたい」で、果ててみたい。

ロッジには下山してきた客が増えた。大型外人のグループはガイドを筆頭に陽気なグループだ。というより、ガイドが陽気にもりたてている。ギターも歌も上手だ。ここで初めて、ネパールソングのレッスンフィリりと、チェンバ・ホを聞いた。

一緒に歌っていたら「ジャパニーズターン」と言われ、びっくり。「スキヤキ」はまあまあながら後が続かない。そうしたら彼の助け船。

「ジャパニーズソングを知ってるよ」で歌いだしたのが「レット・イット・ビー」を「ナンミョウホーレンゲキョー、ナムミョウホーレンゲキョオ」で通すもの。笑い転げた。Yさんとオーストラリア人のペアや、K氏とロッジの女主人とのダンスやと、盛り上がる。

アンヌ達にはこんな芸はないから、生真面目な日本人向き。欧米人には、欧米人向きの陽気なガイドが斡旋されるのであろう。

さらには「私達のガイド、ハンサムだと思わない?」「そうよ。他のガイドなんて蒙古人そのものよ」という具合に、おばさん好みにまで配慮されていたものかは知らない。

味わい深い時間が流れた。でもやはり、帰りたい。帰れるのか? 帰れなきゃ困るんだよ!



【女主人と踊るK氏達。

買物に、キッチン乱入に、ダンスにと、異国の旅と状況を、前向きに楽しんでいた素敵なK氏だった。】

* 3月4日(土)

今朝もクワンデが朱色に染まる。だがもう、写そうという気もおこらない。ヘリが手配できるのだろうか？ いっそ「1レッスン分の月謝を払い戻します」にして、開き直るか・・・。

サイレンが鳴った。待望の視線の中の1番機は、赤と紺ラインのロイヤル・ネパールだ。国営級のそこはフライト判断が最も慎重だという話だ。「あれ来たから、後はどんどん飛んで来るよ」アンツェリンがニコニコ顔でいう。皆のこわばっていた顔もホッと、ゆるむ。ついで2番機。「今度はきっと、俺達の飛行機」

来ない。どうして？ 昨日はこの時間に来てたでしょ。またカトマンズへ電話をいれると、グルカはまずポカラへ飛んだのだそう。たった1機のグルカは、それからルクラへ回るといふ。「速い」じゃなくて「早い」でなくちゃ困るのだ。なんで、ポカラへ先に行くのよ！ なんで1機しかないところを選ぶのよ！ 怒りの方も八つ当たり傾向になってくる。

しかし、わがグルカだけではない。あれからサイレンがウンともならないのだ。冒険パイロットが多いというイエティもこない。またカトマンズへ電話。峠の風が強く、全社がカトマンズで待機しているという。

いよいよ最悪の事態になってきた。G氏の電話のトーンも高くなる。彼が悪い訳でもないのに、私達の視線はきつくなる。どうしてくれんのよ！ の行き場がないのだ。空港ですっと待機しているらしい社長との協議が終わったらしく、G氏の本日の大本営発表。「1時まで様子を見て、それからチャーターヘリの手配を・・・」「こんな国、なにもあてにならない。すぐ手配して下さい」「こんな所、待ってたって無駄よ」皆、険悪。

安全第一、お天気次第なのはそれなりに分かっている。でもこの国の「待つ」とはただぼーと待っている事であって、チャンスをねらって準備万端に待機しているとは、到底考えられない。あのポーター君達だってそうだ。何も運命を変えようとしなくて、おかしいとも言わない、ただただじーっと待っているだけなのだ。やってられるか！

次々フライトアウトを決めていく中で、グルカは「大切なお客がいるから」と最大限の待機をしていたそうだが、やはりタイムアップになった。その間、社長さんは、ヘリを探し、ドル立てでの片道搭乗者を探したりと大変だったらしい。そしてついに、彼の義弟の友人がパイロットというツテで、5人乗りヘリが飛び立ったの報が入った。ばんざーい！ やっと帰れる。と同時に、いかに自分達がパニックに陥るだけの

烏合の衆であったかにも気付いた。「ごめんなさい」 G氏の方はそんな事で傷ついたというより、真にホッとした表情で座りこんでいた。一人なら、のんびりお気に入りのクンプの旅ができただろうに・・・。

彼は、まだ会いたい人や、パソコン調整の用事があり、水曜日までカトマンズに滞在するという。K氏も退職した身だから、バクタブルやパタンを回ってから帰るといふ。そんなふうにやれたらいいが、もう私達は宿題の丸づけの山が目に見えかぶ。

サイレンがなり、ガスにおおわれ始めた空に機影が現れる。何度かヘリを見てきたが、映画ジュラシックパークの、救出ヘリのラストシーンに重なった。やっとこの状況から脱出できる。頭の中では感動のラストミュージックが、ボリュームアップだ。

ここでもハプニングがあり、5人乗りヘリの客の分は4人分と判明した。見るも哀れにH君が気落ちしてしまう。男性軍はこのヘリの第2便だ。さらには一人は明日の便に回らなければならない。歓喜に水をさされた気分だが、迅速にいかねば、第2便も飛べなくなってしまう。

フワッと機上の人になる。早々にがスは切れて、例の段々畑が広がりはじめた。ヘリはさすがにゆっくり広がる視界だ。尾根から尾根へは自動車道路ではない。クンプと同じ、荷担ぎ紐のネパール人と牛馬の行く小道なのだ。その背後には、午後のもやがうっすらかかっているが、不動の巨人達が、まぶしく光っている。その光景に、出会った人達が、重なっていく。

一路カトマンズへ・・・。

完

後日談1) 三男坊は、トンデる母の留守中、近所の旦那の姉宅へ食事に行っておりました。手抜き母よりはるかに食卓事情がよかったにも関わらず、下痢に食欲不振。やつれてしまいました。最後のヤケ食いで体重回復してしまったその母は、反省しつつもちょっぴり嬉しかったものです。

後日談2) 年度末の会員の個別懇談など、帰国後、多忙を極めたのは当然。そんな中でも「同じ世界遺産や」と下賀茂神社へお着物で出掛けた私。早朝予約タクシーのおじさんに「このあいだヒマラヤへ行った人じゃ？」と呆れられた。金沢は狭過ぎる！